

simc News Letter

Sendai International Music Competition

2025年8月号

仙台国際音楽コンクールニュースレター ①

第9回仙台国際音楽コンクール ピアノ部門コンクール評

音楽評論家：道下京子

2001年に創設された仙台国際音楽コンクールは、今年で9回目を迎えた。ピアノ部門のファイナル・ラウンドは、6月26日から28日に開催された。モーツァルトのピアノ協奏曲（第20番～第22番、第24番、第25番、第27番）から1曲と、ベートーヴェンやショパンなどの指定されたピアノ協奏曲から1曲を、仙台フィルハーモニー交響楽団と指揮の高関健と共演。



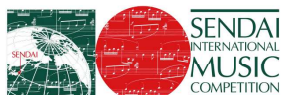
会場には多くの人々が訪れ、ホールは満席に近い状態であった。私は、ファイナルのラウンドを聴く。

第1位のエリザヴェータ・ウクラインスカヤはロシア出身。奇を衒わない音楽表現を通して、作品を手堅くまとめ上げた。チャイコフスキー《ピアノ協奏曲 第1番》では、スケールの大きな演奏を披露。カデンツァにおいて、重みを帯びたまろやかな音で旋律をたっぷりと歌い上げた。表現に、もう少し大胆さがあっても良かったと思う。モーツァルト《ピアノ協奏曲》K467では、細やかな息遣いを通してしなやかな音楽の流れを生み出した。

第2位は、ロシア出身のアレクサンドル・クリュチコ。彼のモーツァルト《ピアノ協奏曲》K467を聴いていると、楽しんで弾いているかのような自由さを感じる。フィナーレの後半でテンポがやや速くなったものの、全体を通して、旋律を歌曲のようにたっぷりと歌い上げていた。ラフマニノフの《ピアノ協奏曲 第3番》。彼の生み出す音は輝きに満ち、実によく鳴り響く。心揺さぶるような熱いパッションあふれる演奏が印象的であった。

第3位の天野薫は東京在住の小学6年生。伸びやかな感性が心に残る。モーツァルト《ピアノ協奏曲》K467。明朗な音で生き生きと演奏した。ただ、腕の振りが大きすぎるせいか、メロディラインが滑らかに聴こえてこなかった点が惜しまれる。むしろ、入賞者記念ガラコンサートで演奏した

裏面に続く。



■お問い合わせ／公益財団法人 仙台市市民文化事業団 仙台国際音楽コンクール事務局

〒981-0904 仙台市青葉区旭ヶ丘3-27-5 Tel:022-727-1872 Fax:022-727-1873 Email:info@simc.jp URL:https://simc.jp

《ピアノ協奏曲》K453（セミファイナルの演奏曲）の方で、彼女の美点は遺憾なく発揮された。矢代秋雄《ピアノ協奏曲》では、作品と演奏者が一体となった気迫あふれる熱演。身体が大きいために音量の不足は否めないが、この年齢にして難曲のコンチェルトをしっかりとまとめ上げる力量は見事としか言いようがない。

第4位のユリアン・ガストの独創的な演奏も評価に値する。彼が選曲したのは、モーツァルト《ピアノ協奏曲》K466 とラフマニノフ《ピアノ協奏曲 第3番》。自身の作品理解が強く主張された演奏であった。全体的に硬さが感じられたのは惜しまれる。

第5位の島多瑠音は、リスト《ピアノ協奏曲 第1番》とモーツァルト《ピアノ協奏曲》K466 を弾いた。エッジの効いたタッチでメリハリのある音楽を創出。音楽にもっと自然な流れも欲しいところであるが、これからさまざまな可能性を期待できる演奏であった。

第6位はヤン・ニコヴィッチで、モーツァルト《ピアノ協奏曲》K466 とチャイコフスキー《ピアノ協奏曲 第1番》を演奏。音そのものに魅力のあるピアニストで、奥行きのある響きに心惹かれた。

入賞者記念ガラコンサートでは、演奏順に天野はセミファイナルで演奏したモーツァルトの K453、クリュチコはラフマニノフ、そしてウクラインスカヤはチャイコフスキーのピアノ協奏曲を弾いた。

私は、2013年の第5回からこのコンクールの、主にファイナル・ステージの取材を行ってきた。優秀な若手ピアニストの早期の演奏を聴くことができる仙台の舞台に、音楽関係者も熱い視線を注いでいる。特に、コロナ禍で開催された2022年の第8回は、非常にハイ・レベルの争いとなった。当時の入賞者6名の多くは、チャイコフスキー国際（第2位）やシドニー国際ピアノ（優勝）など国際的にも高く評価されている。

今回のファイナリストも、個性的で集中力の高い演奏を聴かせてくれた。楽譜に込められた作曲家の創作意思を理解するとともに、演奏者ならではの個性を発揮するのは、並大抵のことではない。また、楽器やホール、そして音楽家を取り巻く環境も、作品が作曲された当時とは大きく異なっている。その中で、作品を現代の感性で捉え、客観的にして独創的な解釈を紡ぎ出していくのが、真の演奏家ではないだろうか。